

複視を契機として発見され、斜台部 骨転移を疑われた腎細胞癌の1例

三重大学医学部泌尿器科学教室 (主任：川村壽一教授)

文野 美希, 松浦 浩, 林 宣男

有馬 公伸, 柳川 眞, 川村 壽一

A CASE OF RENAL CELL CARCINOMA WITH METASTASIS IN CLIVUS PRESENTING AS DIPLOPIA

Miki FUMINO, Hiroshi MATSUURA, Norio HAYASHI,

Kiminobu ARIMA, Makoto YANAGAWA and Juichi KAWAMURA

From the Department of Urology, Mie University School of Medicine

We report a rare case of renal cell carcinoma presenting as diplopia which was caused by a metastasis to the clivus. A 58-year-old man was admitted to our hospital with the chief complaint of diplopia. Head magnetic resonance imaging showed a mass in the clivus accompanied by bone destruction. Metastatic tumor to the skull base was suspected. Further examinations for the primary lesion revealed left renal cell carcinoma. He was relieved of diplopia by radiotherapy to the clivus and subsequently underwent left radical nephrectomy.

(Acta Urol. Jpn. 44 : 319-321, 1998)

Key words: Renal cell carcinoma, Diplopia

緒 言

腎癌は全身のあらゆる臓器、組織へ転移する癌として知られているが、斜台部転移による複視を初発症状とする症例は稀である。われわれは今回、複視を契機として発見され、腎細胞癌によると思われる斜台部骨転移の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：58歳、男性

主訴：複視

家族歴 既往歴：特記すべきことなし

現病歴：1995年12月頃より頭痛が出現し、精査を受けるも特に異常は指摘されなかった。1996年2月、複視が出現したため、近医眼科受診したところ、左外転神経障害を指摘された。MRIにて斜台部に腫瘍性病変を認めたため、当院脳神経外科入院となった。精査にて転移性骨腫瘍が疑われ、原発巣の検索中、左腎腫瘍を指摘されたため、当科紹介となった。

初診時現症：身長 176.5 cm, 体重 67.3 kg, 眼瞼結膜に貧血なく、眼球結膜に黄染なし。視力は右1.0, 左0.6, 両側外転神経障害が認められた。表在リンパ節に腫脹なく、胸部は打聴診上異常を認めなかった。腹部も触診上異常はなかった。また PSA は 0.8 ng/ml 以下 (3.6 ng/ml 以下) と正常域内であった。

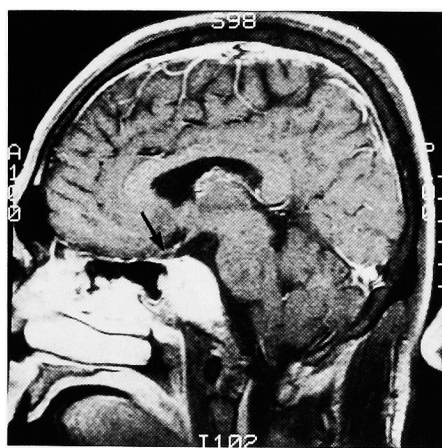


Fig. 1. MRI (T1-weighted) following gadolinium administration, which shows marked enhancement in the clivus (black arrow).

入院時検査所見：血液一般、血液生化学検査では異常所見を認めず、CRP は 0.26 mg/dl, と軽微上昇していたが、赤沈は 10 mm/1h であった。尿検査は異常を認めなかった。尿細胞診では class I であった。

画像所見：頭部 MRI 検査では T1 強調画像にて斜台部に等信号を示す腫瘍性病変を認め、Gd-DTPA 投与ではほぼ均一に造影された (Fig. 1)。その2週間後の頭部 MRI では前回に比べ腫瘍性病変の増大が認められた。骨シンチグラム検査では斜台部付近に集積亢進が認められ、右上腕骨頭部にも集積が認められた。



Fig. 2. Bone scintigram shows high uptake of RI at right brachial bone (bold black arrow) and clavus (fine black arrow).

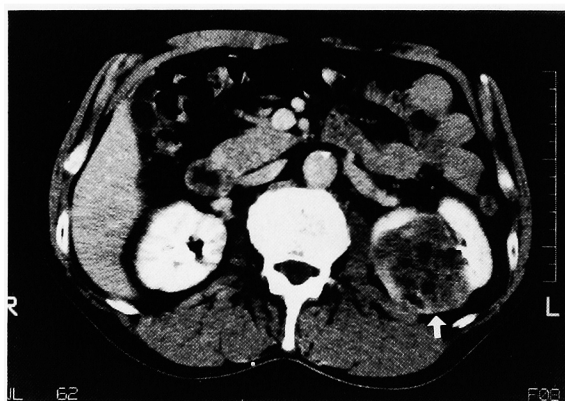


Fig. 3. Abdominal enhanced CT scan revealed left renal tumor (white arrow).

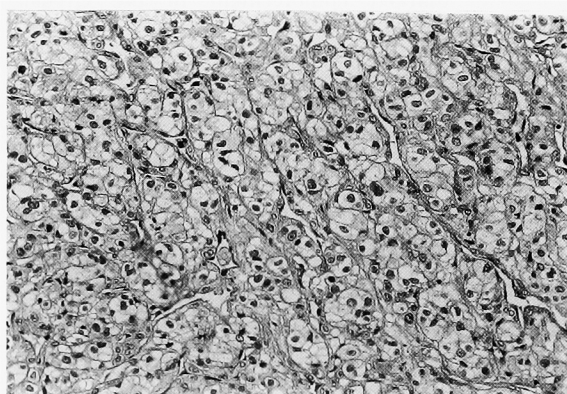


Fig. 4. Microscopic finding showed clear cell subtype (HE stain, $\times 400$).

(Fig. 2). 以上により悪性腫瘍の斜台部および右上腕骨頭部への転移が疑われた。原発巣の検索の結果、腹部超音波検査では左腎上極部に不均一な充実性腫瘍が認められた。腹部CT検査では左腎上極部に low density area を呈する充実性腫瘍が認められた (Fig. 3)。選択的左腎動脈造影では左腎上極に腫瘍濃染像が認められた。

以上の所見から左腎細胞癌が疑われた。さらに精査が行われたが、他に原発巣となりえる病変は認められず、斜台部、右上腕骨頭部に骨転移を伴った左腎細胞癌と診断された。斜台部骨転移巣に対し、計 32 Gy の放射線療法施行後、1996年4月25日根治的左腎摘出術を施行した。

手術所見：全身麻酔下に正中切開にて経腹的に左腎を摘出した。腫瘍は被膜化されており、周囲組織との癒着は認めなかった。

病理所見：摘出標本の重量は 470 g で、断面では腎上極に 6×4 cm 大の淡黄色充実性の腫瘍が認められた。病理診断は renal cell carcinoma, intermediate type, alveolotubular type, clear cell subtype, grade 2, pT2N0M1pV0 であった (Fig. 4)。

術後経過：術後経過は順調で、術後第18病日よりインターフェロン- α 500万単位週3回投与を開始した。複視も照射終了後ほとんど消失した。術後第40病日で退院し、インターフェロン- α の投与を継続中で、術後6カ月の現在、右上腕骨頭部骨転移は著変認められず、また再発の徴候なく外来にて経過観察中である。

考 察

腎癌の初診時、約30%の症例で、すでに転移が認められるといわれる¹⁾。転移部位としては肺、リンパ節、肝などと共に骨転移の頻度が高く、6.9~9.0%と報告されている^{2,3)}。骨転移の中では下肢、脊椎、上肢、骨盤などに多く、頭蓋骨は1.5%ときわめて稀である⁴⁾。

特に頭蓋底への骨転移は、脳神経を侵し、多彩な臨床症状を示して発症する。林ら⁵⁾は24例の頭蓋底骨転移症例において初診時、9例(38%)に複視を認めたと報告している。特に頭蓋底の一部である斜台部への骨転移は動眼神経、滑車神経、外転神経を障害し、複視を生じることが多い。

本症例は腎癌による斜台部の骨転移より左外転神経を障害し、複視を生じたものと考えられる。今回、われわれが検索した範囲では、頭蓋底骨転移巣より初診時複視を生じたと考えられる症例として32例の報告が認められた (Table 1)。この中では前立腺癌や乳癌などの骨転移を生じやすいものが多かったが、腎癌は自験例を含め2例(6.3%)と少なかった。一方、これら32例の頭蓋底への転移部位をみると、斜台部は

Table 1. The case reports of cranial base bone metastasis discovered by diplopia (n=32)

Primary malignancy	No. Cases (%)
Prostatic cancer	8 (25.0)
Breast cancer	2 (6.3)
Gastric cancer	2 (6.3)
Renal cancer	2 (6.3)
Thyroid cancer	2 (6.3)
Hepatic cancer	1 (3.1)
Lung cancer	1 (3.1)
Hemangiopericytoma	1 (3.1)
Not specified	13 (40.6)

4例と少なかった。

このように複視を契機として腎癌の斜台部骨転移が発見される症例はきわめて稀であると考えられた。

結 語

複視を契機として発見される腎細胞癌によると考えられる斜台部骨転移の1例を経験したので若干の文献的考察を加え、報告した。

文 献

- 恩田 純, 児玉安紀, 勇木 清, ほか: 悪性腫瘍の骨転移—頭蓋骨転移症例の検討. 医療 **43**: 300-306, 1989
- 里見佳昭: 腎癌333例の臨床統計的観察. 日泌尿会誌 **78** 1379-1387, 1987
- 星 宣次: 腎癌骨転移に関する検討. 日泌尿会誌 **82**: 649-654, 1991
- 大西哲朗, 町田豊平, 増田富士男, ほか: 骨転移を有する腎細胞癌症例の臨床的特徴についての検討—肺転移症例との比較検討. 泌尿紀要 **35**: 1113-1118, 1989
- 林 真也, 山下 孝, 岡田 進, ほか: 頭蓋底骨転移の放射線治療経験. 癌の臨 **40**: 413-418, 1994
- 福島正隆, 矢野真知子: 複視により発見された癌の頭部遠隔転移例. 臨眼 **47**: 402-403, 1993
- 栗栖 薫, 山中千恵, 児玉安紀, ほか: 眼球突出で発症した前立腺癌の頭蓋底転移例. 癌の臨 **31**: 303-307, 1985
- 木下浩作, 山本隆充, 佐々木淳, ほか: 前立腺癌の孤立性斜台部転移巣の1治験例. 日大医誌 **49**: 735-739, 1990
- 井原雄悦, 小西 洋, 三浦謙造, ほか: 甲状腺癌と橋本病を合併した重症筋無力症の1例. 医療 **47**: 538-541, 1993
- Ochiai H, Nakano S, Goya T, et al.: Pituitary metastasis of thyroid follicular adenocarcinoma. Neurol Med Chir **32**: 851-853, 1992
- Kay MC: Face pain and diplopia in patient with breast cancer. Am J Ophthalmol **100**: 344-345, 1985
- Ranson DT, Dinapoli RP and Richardson RL: Cranial nerve lesions due to base of the skull metastasis in prostate carcinoma. Cancer **65**: 586-589, 1990

(Received on September 8, 1997)
(Accepted on March 23, 1998)